

# 同一性否定の分類に基づく比喩の標識となる表現の整理

加藤 祥<sup>1,\*</sup> 浅原 正幸<sup>2,†</sup>

<sup>1</sup> 目白大学 <sup>2</sup> 国立国語研究所

Organizing based on the classification of negation of identity  
in expressions serving in metaphorical indicators

Sachi Kato<sup>1,\*</sup> Masayuki Asahara<sup>2,†</sup>

<sup>1</sup>Mejiro University <sup>2</sup>National Institute for Japanese Language and Linguistics

The difference between metaphors and similes tends to be regarded as the absence or presence of metaphorical indicators. However, we cannot explore all possible metaphorical indicators. Furthermore, we are able to define neither the types nor ranges of metaphorical indicators. There are possibilities for finding new metaphorical indicators and categorising their functions. Therefore, we explored clue phrases for the understanding of figurativity from large-scale simile examples. As a result, we found many clue phrases which have not been reported as metaphorical indicators in preceding studies. Most of the newly found clue phrases can be categorised into the expressions to differentiate between the topic and vehicle. The clue phrases are included with many simile examples. When the representative metaphorical indicators occurred in a simile expression, the clue phrases also co-occurred. The metaphorical indicators can be regarded as the degree to which the linguistically obtainable group of clue phrases in metaphorical expressions is grasped, while metaphors and similes should be a continuity of metaphorical expression with their gradations rather than two distinct sets.

**Keywords:** metaphorical indicator (比喩指標), simile (直喩), metaphorical expression (比喩表現)

Received 2 June 2023; Accepted 11 September 2023

## 1. はじめに

比喩は、事象の伝達や認知において言語的な基盤として重要な表現とされている。中村 (1977) は、「比喩とは、表現主体が、表現対象を、それを過不足なく直接にさし示す言語形式を使わないで、その代わりに、言語的な意味では他の事物・事象に対応する言語形式を提示し、その言語的環境との違和感や、それが現れることの文脈上の意外性などで、受

容主体の想像力を刺激して、両者の共通点を推測させることによって、間接的に伝える表現技法である (pp. 154–155)」とする。

読み手や聞き手という言語の受容主体にとって、何によって比喩表現が直接にさし示していない、すなわち字義どおりでない意味を持つと判断するのか、比喩の意識をどのように把握するのかという観測の調査は、「A のような B」における「のよう」に見られる比喩の標識が用いられている、いわゆる直喩表現に焦点をあてた研究が進められてきた。隠喩表現は一般的に比喩の標識が用いられずに、喩辞と被喩辞を直接結びつける技法とされるが、直喩と隠喩は言語形式の違いの問題とも考えられるためである。しかし、実際に比喩の標識のみを多量に収集した資料は少なく、また、比喩の標識はいわゆる隠喩では全く見とめられないのかという疑問も残る。

そこで、ある表現が比喩表現と判断された際、判断

本稿は、第 21 回日本認知言語学会「比喩表現の指標となる「同一性否定」の手がかり句」(加藤・浅原, 2020) の内容を含む。同発表では、中村 (1977) の指標比喩用例集のみを対象としていたが、本稿の資料は、BCCWJ の指標比喩データベースおよび MIP による比喩表現情報付与データを調査対象として広く手がかり句を収集したものである。また、収集データの分類について分析を行い、資料の有用性を検討した。

\* 責任著者。E-mail: s.kato@mejiro.ac.jp

† E-mail: masayu-a@ninjal.ac.jp

において比喩表現の標識と考えられた表現を網羅的に収集し、収集した手がかりを分類した。日本語比喩表現の表記を収集するためのデータとして、加藤・浅原 (2023) の電子化した大規模な日本語指標比喩の用例集 (中村, 1977), 日本語比喩表現コーパス (加藤他, 2020, 開発中データ) を用いた。これらの比喩表現用例は国立国語研究所の言語資源としてリポジトリ <https://doi.org/10.15084/00003669>・ダウンロードサーバ (BCCWJ データ配付サイト<sup>1)</sup>) <https://bccwj-data.ninjal.ac.jp/mod/folder/view.php?id=20> にて公開しており、本稿で新たに付与した情報も追加資料として公開する予定である。

本資料は、指標比喩用例から収集した比喩性を判断する標識となり得る手がかり句の例およびそれらの分類情報である。本稿では、手がかり句収集と分類について概説する。本稿の収集した手がかり句は、読み手が比喩性を強く感じる表現 (およびその周辺) に含まれている傾向にあり、ほとんどが喩辞と被喩辞の同一性否定の観点で分類することが可能であった。

比喩表現においては、喩辞と被喩辞が同一でないということが明示的である必要があり、そのことを何らかの形式で表した表現 (本稿の収集した手がかり句例) などにより認識される場合があるものと考えられる。本資料の公開により、比喩の標識となり得る手がかり句を大規模な比喩表現用例の収集に利用することが可能となる。手がかり句は、直喩にとどまらず隠喩とされる表現でも取得されているため、様々な種類の比喩表現を認識する言語形式の例としての活用が期待される。さらに、近年自然言語処理分野で語義の曖昧性解消の研究が盛んにおこなわれており、その中で比喩表現のような語義の転換が問題となる。本資料により、語義の曖昧性解消に対して新しい観点を与えられる。

## 2. 比喩の標識となる表現

隠喩と直喩の差は、比喩の標識の有無ととらえられる傾向にある。日本語の直喩について、山梨 (1988) は、以下のように定義する。

あるもの (A) を表すのに、それと似ている別のもの

の (B) で表現する言語手段の一種であるとし、「直喩は、その類似性の表現として、“のような”、“みたいな” (LIKE, SIMILAR TO) のような表現を用いることにより、ある対象を他のものにたとえて叙述する。この種の比喩は、基本的には [A IS LIKE/SIMILAR TO B] の形式に基づく表現法であり、類似性の表現機能にあたる LIKE/SIMILAR TO の部分が直接的に明示されるのでそのように呼ばれる。(p. 13)』

すなわち、「直喩 (simile)」は、受容主体が表現主体の比喩の意識を感じると特定の言語形式が抽出可能であり、「何らかの言語形式」(中村, 1977) によって比喩表現であることを示す「指標比喩」(中村, 1977) と考えられる。そのため、比喩表現の判断基準は明示的とされ、比喩表現の調査が行われるにあたっては、「何らかの言語形式」の典型的な例である「ようだ」などの比喩の標識となり得る要素を含む用例収集や分析が行われる傾向にある (e.g., 小松原, 2012; 岡他, 2018; 内海, 2005)。

英語では、Goatly (1997, 2011) が、広く比喩に関わる言語形式の分類を示し、like や as をはじめとする Similes and comparisons が示されるほか、Explicit markers (metaphorically, figurative など), Intensifiers (literally, really, quite など), Hedges or downtoners (a bit of, almost など), Semantic Metalanguage (more than one sense, mean など), Mimetic Terms (image, picture など), Symbolism terms (symbolic, sign, instance など), Superordinate terms (sort of, kind of など), Mental and verbal processes (seemed, looked, believe, call など), Orthography (“ ”による取り立てなど), Modals and conditionals (must, would など) を示しており、日本語でも多様な言語形式の取得が考えられる。

日本語における比喩指標の定義および比喩の標識として認める範囲は、研究者によって異なり、比喩の標識となり得る言語形式を網羅したリストが存在するとも言えない。山梨 (1988) は、「直喩を形式的に特徴づける標識」とし、「のように」「みたいな」などを典型例とするが、「ほどの」「さしずめ」などの「典型的ではない標識」が、先行文脈を示すことで「直喩標識」の一種として機能するとしている。鍋島 (2009) は、まず、「シミリ」に「メタファー」との連続性をもとめ、この二つの区分に疑問を呈する。そして、「シミリの定義試案」として、「①形式

1) 「BCCWJ データ配付サイト」(<https://bccwj-data.ninjal.ac.jp/my/>) は、有償版の『現代日本語書き言葉均衡コーパス』購入者のみが閲覧可能である。利用時には検索アプリケーション「中納言」ログイン画面からのログインが求められる。

**表 1**  
 比喩の標識となる表現の分類

本論文	手がかり句		
	比喩指標要素 (構成要素)		
何らかの言語形式			
中村 (1977)	「比喩指標」		
	「比喩指標要素」 (比喩指標の構成要素)		
直喩標識			
山梨 (1988)	形式的に特徴づける	典型的でない	
鍋島 (2009, 2017)	メタファー明示表現		
	形式的標識	語彙的	構文を含む言語表現
比喩に関わる言語形式			
Goatly (1997, 2011)	Similes and comparisons, Explicit markers 等	Intensifiers, Hedges or downtoners 等	Orthography 等

的に、『ようだ』などの標識を持ち、② 意味的に、リテラルではない類似性のもの」とするが、先の文に「標識」を含み、以降の文に現れないなどの境界を隔てた「長距離シミリ」の例や、「a.『ようだ』、『ような』のみを含むもの b. 語彙的に表現するもの c. 言語表現 (構文を含む) で表現するもの」などを示し、「標識」の多様性を指摘する。また、鍋島・中野 (2017) は、いわゆる比喩の標識を「メタファー明示表現」と呼ぶが、意味的なものと統語的なものが混在することを指摘しながら、10 種のパラメータ (比喩化フレーム) に整理している。比喩化フレームのパラメータは、〈比較〉(「比べられる」など)、〈類似〉(「ように」など)、〈同一〉(「と同じ」など)、〈差異〉(「と違う」など)、〈範疇化〉(「一種の」など)、〈程度〉(「まさに」など)、〈認識〉(「思える」など)、〈仮想〉(「まるで」など)、〈言語化〉(「いわば」など)、〈比喩化〉(「譬える」など) が提案されている。

中村 (1977) は、比喩表現について「ある一定数の指標、および、そのかなり規則的な組みあわせ、あるいは、ある条件下におけるその序列、といった形で整理することが、少なくともある程度は可能であろう」とし、文学作品用例から多様な比喩指標を収集したが、「外形上の指標をそなえたものばかりではない」と指摘する (p. 145)。

表 1 にまとめたように、先行研究では直喩 (指標比喩, Simile) と隠喩 (結合比喩, Metaphor) の

連続性を認めたくて、典型的ではない標識 (手がかり句) についても検討が進められてきた。それでは、はたして日本語比喩表現において、比喩の標識となる表現はどの程度多様に存在し、どのように機能しているのか。また、隠喩と直喩は標識の有無により区別され得るものなのか。本稿は、比喩表現の用例を読む際、比喩性の把握に関わった表現を広く手がかり句として収集し、取得できる言語形式の傾向を定量的に確認することとした。さらに、それらの性質を整理し、比喩の標識としての機能の一般化および分類を試みた。分類に際しては、喩辞と被喩辞の同一性を否定する観点に着目した。特に、隠喩と直喩の差と認め難く、一般的に標識と認識されにくい表現であっても、「何らかの言語形式」として取得できれば、比喩の標識の定義を比喩性の把握の観点で再考することが可能となると期待した。比喩であることが把握されるときに、いわゆる明らかな指標比喩 (直喩) と明らかな語の結びつきにおける選択制限の違反 (隠喩) の間に手がかりの持つ比喩の標識としての機能が有用となる可能性があるためである。

### 3. 日本語比喩表現用例集を用いた手がかり句の抽出

日本語比喩表現の標識の収集を行うにあたっては、既存の日本語比喩表現用例集を用いた。指標比喩用例集として、中村 (1977) の用例集と日本語コーパスを利用した収集例を使用した。指標比喩用例から広く収集した比喩性の把握に役立つ表現 (手がかり句) を分類することで、比喩の標識となり得る表現の機能や出現傾向の整理を試みた。

比喩表現を広く収集した用例集には『比喩表現辞典』(中村, 1995) などもあるが、辞典は「沼のようなぬかるみ (例文番号 921)」「疑惑が渦になってわき上がって (例文番号 4788)」のような項目例とされており、当該表現部分の周辺は確認できない。そこで、中村 (1977) に収集された 1,264 例 (357 比喩指標要素による 1,617 の指標比喩類型に対応した典型例が実例として文単位以上で掲載されている (pp. 200-304)) を用いることとした (3.1 節)。また、中村 (1977) の「比喩指標要素」とその類語句を利用した収集例 (加藤他, 2020) を用い、均衡コーパスの指標比喩用例における手がかり句も収集した (3.2.1 節)。なお、日本語の均衡コーパスの一部に対し手

作業で網羅的な比喩表現付与を試みた比喩表現コーパス (加藤他, 2020) は, 複数作業者の合意による「指標」の付与がある。複数作業者の合意による「指標」の取得状況及び手がかり句の収集が可能であるのかという点についても確認した (3.2.2 節)。

本稿の作業は, 加藤他 (2020), 加藤・浅原 (2023) および後述する日本語比喩表現コーパスにおける情報付与作業手順と同様の基準で, 第一著者が行った。作業の概要は以下の通りである。

- ① 当該用例に比喩表現が含まれるかどうか判定する。複数の比喩表現が含まれる場合には, 該当表現を抽出する。(1) では「そういうときの父の眼はニワトリの眼つきに似てくる」が抽出される。
  - (1) そういうときの父の眼はだんだんニワトリの眼つきに似てくる (中村 (1977) における例文番号 130, 例文番号については以降同様)
- ② 用例中に比喩表現が含まれる場合, 類似性による転換 (隠喩)・量的転換 (換喩)・質的転換 (提喩) および類似性による転換の下位分類 (擬人化・具象化など) の種別を付与する。用例が比喩表現でない場合は, 例示や婉曲などの種別を付与する。(1) では, 「類似性による転換 (生物→人)」が付与される。
- ③ 比喩表現の種別を付与した場合には, 喩辞と被喩辞を付与するとともに, 把握の根拠として, A 型の「比喩指標」をはじめとした比喩表現の認識に関わった「何らかの言語形式」(手がかり句) および B 型の異質性を読んだ「結合」(「さえざる」は小鳥だけについていうなどの選択制限における違反) を抽出する。(1) では, A 型把握における手がかり句として「似る」「そういうとき」が抽出され, B 型把握における結合として「父の眼がニワトリの眼つき」が抽出される。

本作業における③の A 型把握について, 比喩表現であるという認識に関わった「何らかの言語形式」とされた全てを, 広く「手がかり句」として収集した。(1) は「似る」が中村 (1977) の比喩指標要素とされる用例であるが, 「そういうとき」も手がかり句として収集されている。収集した「手がかり句」は 3.2.2 節で後述する「指標」および MRW (Metaphor Related Word) に該当する。

### 3.1 中村 (1977) の指標比喩用例集 (1,264 例) からの手がかり句の抽出

中村 (1977) は, 357 の「比喩指標要素」とそれらによる 1,617 の指標比喩類型を示す。用例集の 1,264 例に対し, 中村 (1977) が典型例であると指摘する「比喩指標」の内外を問わず, 用例中から得られた手がかり句を網羅的に抽出する作業を行った。

中村 (1977) の定義と類型に従い, (2) における「どこか (F-8-5)」「似る (D-12-1)」などを「比喩指標要素」, (1) における「どこか・に似た」などを「比喩指標」(実現形) と呼ぶが, さらに, (2) では「それ (は)」も比喩性の把握に関わったとされたため, このように本稿の作業において新たに収集された表現, 中村 (1977) や辞書などにないものの比喩性の判断に関わると考えられる表現を含め, 広く「手がかり句」と呼んで抽出した。なお, 1 用例中で複数の要素が同機能と判断された場合は, 「比喩指標」に準じ「何らかの言語形式」として 1 件の手がかり句と数えた。

- (2) それはどこか竹に似た形と性質とを持った強そうな草であった。(中村, 1977, 例文番号 257<sup>2)</sup>)  
結果, 比喩表現の把握根拠となった「何らかの言語形式」が 1,926 件収集され, 中村 (1977) の指摘した「比喩指標」のほか 383 種類の新たな手がかり句が取得された。中村 (1977) は文学作品から収集した用例であるため, 特に文脈上の手がかり句として機能していると考えられる表現が抽出されたという特徴が見られたが, 「小説・映画 (に出てくる)」「おとぎ話 (童話・メルヘン)」などをはじめ, 「かけ離れた」「よく見ると」, 時間の違いを表す「遠い昔」「かつて」などの表現が各種取得されていた (例 (3) (4))。

- (3) 安っぽいテーブルに向って, 焼肉を注文している自分を, ぼくは映画の主人公か何かのように, 極彩色で感じていたものである。 (例文番号 695, 下線は筆者により, 手がかり句を示す (以降同様))
- (4) それは遠い昔, たった一つしたかの女のいのちがけの, 辛い悲しい恋物語をふぎけた浮気筋や, 出世の近道の男釣りの経歴と一緒に噂される心

2) 中村 (1977) の指標比喩用例集において, 各用例に付された例文番号である。加藤他 (2020) の例文については, BCCWJ のサンプル ID を記す。以降の例文についても同様とする。また, 用例の読点「、」は「,」に変更し, 句点「。」は「。」に変更した。その他の記号は原文のままとした。

外な不愉快さに同じだった。(例文番号 736)

### 3.2 日本語比喩表現コーパスの指標比喩用例からの手がかり句の抽出

#### 3.2.1 指標比喩データベース (822 例) からの抽出

英語では、メタファーと共起する表現をコーパスから収集した例として、Cameron et al. (2003) の actually, almost, imagine, just, kind of, a little, really, sort of を調査した例があるが、日本語では、加藤他 (2020) が、中村 (1977) の「比喩指標要素」とその類語句を「比喩指標」となり得る要素として手がかりとし、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(以降 BCCWJ) から網羅的な指標比喩の収集を試みた例がある。この調査では、357 の「比喩指標要素」の類似表現(「比喩指標要素」の類義語句で、「比喩指標」となり得る要素)を含む候補が 21,541 例収集されたが、このうち 56 例 (0.3%) のみが比喩表現と判定された。よって、中村 (1977) の収集した「比喩指標要素」の類似表現として得られた新たな「比喩指標」は、「と表現する」「気付く」「感覚」など 7 つの種類のみであった。既存の「比喩指標」の類似表現を収集するのでは、十分な比喩の標識の収集は困難といえよう。また、中村 (1977) のリストは多様な「比喩指標」を示すが、そもそも既存の「比喩指標」のみでは比喩表現の収集は困難である<sup>3)</sup>。類似表現にも限界があるといえる。

そこで、加藤他 (2020) の用例集 (822 例) から、「比喩指標要素」の前後文脈を含め、広く手がかり句の抽出を試みた。作業は 3.1 と同様に第一著者が行った。結果、「何らかの言語形式」として比喩把握に関わると考えられた手がかり句が 936 件得られた。新たな手がかり句は 161 種類取得された。前節同様、「SF・西部劇 (に出てくる)」や「要するにどうということ」「おかしいですか」のような表現も幅広く取得された。「」や“”のような形式的な取り立てを示す記号のほか、「ならば」「れば」「たら」などの仮定、「としての」「としては」などの限定表現が多く取得される傾向が見られ、慣用表現(「口にする」「耳にする」など)や結合の明確な場合以外では、1 つの用例から複数の手がかり句が取得される傾向にあった。(5) は、「にする (D-1-16)」に

よって収集された例であるが、「したとき」「なら」「こんな」「感じ」も取得されている。

(5) 「ガーーン! つ、ついにここまで来たか…。」「ジョー&飛雄馬」創刊号を手にしたときの衝撃を、吹き出しにするならこんな感じ。(BCCWJ のサンプル ID: PN2a\_00022, 以降同様)

#### 3.2.2 日本語比喩表現コーパスに見られる手がかり句

本稿の手がかり句抽出作業は第一著者が行っているため、複数作業者が「指標」と判定した表現を確認し、一般に典型的な比喩の標識のみが「指標」と認められているのかという点について検証しておく。

指標比喩(直喩)とされた用例数は少ないが、日本語比喩表現コーパスとして、MIPVU (Steen et al., 2010) の日本語コーパス対応として、新聞(以降 PN)、書籍(以降 PB)、雑誌(以降 PM)のサブコーパスの一部に対し、比喩性や比喩の種類別、「指標」などの情報が付与される開発中データがある<sup>4)</sup>。英語の大規模な比喩表現コーパスには VU Amsterdam Metaphor Corpus がある。Steen et al. (2010) が、BNC-Baby コーパスから抽出した 4 レジスタ約 19 万語に、Steen & Pragglejaz Group (2007) の比喩情報付与手順である MIP (Metaphor Identification Procedure) を拡張した MIPVU によって、語単位でメタファーに関係する判定 (MRW: Metaphor Related Word) を付したものである。MIPVU は、指標比喩を Metaphor と区別するものではないが、MIP が認定する比喩表現を直喩や境界事例にも拡張し、「比喩指標要素」に該当すると考えられる「MFlag」の付与を行っている。

そこで、日本語比喩表現コーパスにおける PN, PB, PM に付与された比喩性の判断に有用とされた「指標」(MFlag に該当する)を抽出することにより、指標比喩の実態の確認と比喩の標識の収集が可能となると考えられた。なお、本作業は 3 名の作業者によって進められているため、ここでは作業者 3 名の合意のある「指標」要素のみを数えた。381 件の「指標」の付与があったが、337 件 (88.5%) を収集している。30 万語規模のコーパスから複数作業者により合意された 1 万件ほどの比喩表現が取得されているが、そもそも「指標」は 300 件ほどしか取

3) 加藤他 (2020) によれば、BCCWJ から中村 (1977) の比喩指標要素を含む比喩表現候補が 97,118 例収集されたが、人手により比喩表現と判定された用例は 1,020 例 (1.1%) にとどまっていた。

4) 文脈上の意味情報が自立語の全てに付与され (加藤他, 2019b)、助動詞には用法が付与され (加藤他, 2019a) た約 34 万語であり、語レベルで比喩的な意味との重ね合わせが可能である。

表 2

MIPVU により取得された日本語比喩表現および比喩指標要素

レジスタ	語数	比喩表現数	MRW	MFlag
PB (書籍)	111,983	1,789 (1,597)	7,326 (6,542)	54 (48)
PM (雑誌)	117,568	3,176 (2,701)	10,577 (8,996)	100 (85)
PN (新聞)	111,754	5,018 (4,490)	9,074 (8,119)	183 (164)
計	341,305	9,983 (2,924)	26,977 (7,904)	337 (99)

註) 括弧内は 10 万語あたりの相対頻度。

得られていなかったため、指標比喩とされる比喩表現の出現率が低いという可能性がある。

表 2 に、収集された「比喩指標要素」数を示す。「比喩指標要素」の数は、比喩表現と判定された表現のうち、「指標」としてマークされた要素の数である。

「比喩指標要素」の分布を表 2 に示す。上位頻度の「比喩指標要素」は「よう (17.8%)」「的 (15.7%)」「いう (8.0%)」「風 (5.0%)」「状 (4.2%)」などであった。典型例と考えられる「よう」が最も多く取得されているが、表外では「劇的 (0.9%)」「系 (0.6%)」「象徴 (0.6%)」「調 (0.6%)」「と取る (0.3%)」「鏡 (0.3%)」「戻す (0.3%)」など 18 種類の新たな手がかり句が取得されている。

中村 (1977) が「比喩指標要素」として認定する以上に、比喩の標識として読み取られた手がかり句の種類が多かったといえる。しかし、約 30 万語のコーパスから 68 種類しか取得されていない。また、新規に取得された手がかり句は 18 種類であったが、ほぼすべてが中村 (1977) の指摘している「比喩指標要素」の同種の意味で用いられる表現か、接尾辞をはじめとする類似表現であった。ただし、「鏡」や「表現」のように新たな種類の表現も取得された。手作業で収集された比喩表現コーパスから、複数の作業者が合意した「指標」として、既存の「比喩指標」とは異なる種類の語句が散見されている。誰もが比喩の標識として把握する「指標」はそれほどない可能性はあるが、典型的ではなくとも複数の読み手に「指標」と認められる表現はあるといえる。

#### 4. 収集された手がかり句の整理

前節で新たに収集された比喩性把握の手がかり句を分類し、整理を試みた。観点 (4.1 節) と分類 (4.2 節)、結果 (4.3 節) を示す。また、手がかり句の性質と活用可能性を考察し、既存の標識との関係を確かめ、比喩性把握における有用性の検証を行う (4.4 節)。

##### 4.1 手がかり句分類の観点 (喩辞と被喩辞の同一性の否定)

Goalty (1997, 2011) は、言語形式の外観により比喩の標識 (markers) の 11 分類を示す。中村 (1977) は、品詞や「比喩指標要素」による分類を用いており、同分類を援用する加藤他 (2020) も品詞分類を行うほか、換喩・提喩との区別や擬人化や具象化などの隠喩の種類別の分類などを試みている。しかし、形式を用いた分類では、「よう」や「みたい」などの高頻度の標識を除き、連体詞や名詞 (接尾辞) などは、実用例において出現頻度が低く、分類しにくいという問題が生じる。また、比喩性の判断に有用とされて新規に取得された手がかり句も各種見られる。よって、手がかり句の機能の観点からの分類を試みた。

本稿では直喩と隠喩の差を考慮していないが、Israel et al. (2004) は、直喩が “match structures construed as simultaneously present in both domains: similes do not add structure to a target, but highlight what’s already there. (p. 132)” であるとし、概念メタファーが起点領域から目標領域へ構造を投影することとの差異を示唆する。この指摘から、特に直喩において起点領域と目標領域に存在するものが着目されるとすれば、比喩性が把握されるにあたり、起点領域と目標領域が同一でないことを示す表現が周辺文脈より取得される可能性が考えられた。また、隠喩の判定について山梨 (2015) は、「隠喩の場合は、表層レベルの一時的断定 (A IS B) が偽であることが前提となっており、この前提に基づいて、A と B との間の類似性 (A IS LIKE B) が二次的に断定されている (pp. 79-80)」とする。同様に「ジュリエットは太陽だ (Juliet is the sun)」の字義的な不条理が偽であることが隠喩の検出メカニズムの引き金 (Gibbs, 1994) とされることなどからも、当該比喩表現の周辺に、当該表現が不条理あるいは偽であることを

認識可能な表現が取得される可能性が考えられた。さらに、何らかの言語形式が読み手に比喩の標識であると意識されず、隠喩であるように読まれる場合であっても、文脈的に当該表現が偽であることを示す手がかり句が取得可能と期待された。なお、菊地 (2020) は、「比喩は命題としては偽である情報を話者の実感としては真とすることにより形成される」とし、「比喩はこのような偽の命題を真として提示し得る形式によって表現される」ことを指摘し、命題の捉え方について分析を行っている。よって、話者が命題を真とする表現であっても、周辺文脈から命題が偽と読み手に把握されるような表現が取得できる可能性が考えられた。

また、山梨 (2015) は、〈強い同一性の直喩標識〉〈弱い同一性の直喩標識〉〈同一性の否定の直喩標識〉(p. 86) の三種類の分類可能性を示す。また、類似性の認識は「一方においては (実際には、A と B は異なる存在であるという前提から明らかなように) 〈A は B ではない〉 (A ≠ B) という認識に通じる (同 p. 86)」ため、「実際には A と B とは異なる存在であるという前提 (すなわち、〈A は B ではない〉 (A ≠ B) という前提) に認知主体の認識がシフトした場合には、〈同一性否定の直喩標識〉に基づく修辭表現が作り出される (同 pp. 87-88)」とする。

山梨 (2015) の〈同一性否定の直喩標識〉は直接的な否定表現に限定されるが、明らかに比喩の標識と判断しにくくとも、文脈的に当該表現が偽であることを示す「何らかの言語形式」として、広く A と B、すなわち喩辞と被喩辞の「同一性否定」を示すような「標識」という観点での分類が有用である可能性が考えられた。また、読み手が比喩表現を認識するに際し、文脈的に喩辞と被喩辞が同一ではないことが表現内外にて示されており、そのことを示す何らかの手がかりとなる要素が語句として取得しやすい可能性がある。

そこで、比喩表現の出現する文脈には当該表現が偽であることを示す、あるいは喩辞と被喩辞が同一ではないと示す表現が「何らかの言語形式」として含まれる可能性に着目して、収集した手がかり句の分類を試みることにした。用例における手がかり句を喩辞と被喩辞を同一でないとする機能によってグループ化し、次節に類別の特徴を整理した。

## 4.2 手がかり句の分類

まず、収集した手がかり句が、各用例において喩辞と被喩辞の同一性を否定すると判断された場合、どのように否定していたのか、手がかり句の機能を付与した。

用例中において、喩辞と被喩辞が同一ではない判断の手がかり句が含まれていると考えられた中村 (1977) の用例は、1,246 例 (1,264 例中の 98.6%)、加藤他 (2020) の用例は 637 例 (822 例中の 77.5%) であった。なお、中村 (1977) が「比喩指標」類型の (文学作品における) 典型例であるのに対し、加藤他 (2020) は均衡コーパスから収集された用例のため、高頻度例や同文章内で重複する結合の例なども含むという用例集の性質の違いが見られている。たとえば、「慣用」表現と分類されていた用例が 159 例 (17.2%) あり (加藤他, 2020)、「手にする」「口にする」などは高頻度である。これらの慣用表現は特に比喩性が意識されることなく一意の句と把握される傾向にある。また、「比喩指標」によるというよりも結合の異質性が高いと考えられる例も 101 例 (12.3%) あった。よって、実例からの収集の場合は、慣用表現そのものを手がかり句とすることや、文章内容による選択制限の考慮も有用と考えられる。しかし、実態的な調査においても、喩辞と被喩辞の同一性を否定する機能の手がかり句は高い頻度で取得可能といえ、比喩性の把握に有用といえよう。

喩辞と被喩辞の同一性を否定する手がかり句は、大まかに次の 5 種類に分類が可能であった。分類は第一著者が行い、手がかり句を付与した機能でグループ化した。なお、分類しにくい手がかり句は「その他」とした。

### ① 別 (のものであるという) 指示 (4.2.1)

類似：そっくり、さながら、あたかも、似る、など

区別：それは、こちらは、など

### ② 限定や程度性 (4.2.2)

限定：としか、とっては、など

程度：ほど、くらい、など

### ③ 仮定、疑問や推定 (4.2.3)

仮定：ならば、そう考えると、など

疑問：あろうか、だろうか、など

推定：気がする、と思う、など

### ④ 別の時間 (4.2.4)

過去 (現在の文脈)：思い出す、した時、など

現在 (過去や未来の文脈) : 今度は, この頃, など

未来 (現在の文脈) : やがて, となる, など

⑤ 否定の明示 (4.2.5)

ありえない, でない, など

逆接: けれども, だが, など

⑥ その他 (4.2.6)

文脈上の, その他の比喩表現, 非現実的な表現 など

以下に, 「その他」を加えた6分類と手がかり句の例やそれらの機能, 用例を示す。なお, 分類にあたり, 鍋島・中野 (2017) の「比喩化フレーム」の10パラメータを参照した。

#### 4.2.1 別 (のものであるという) 指示

「そっくり」「さながら」「あたかも」「似る」(例 (2), (6)) などによって類似が示される場合, 喩辞と被喩辞が別のものであることが示される。類似性の認識が, A と B は異なる存在であるという前提による (山梨, 2015) ためである。鍋島・中野 (2017) では〈比較〉を前提とするパラメータとして分類される「メタファー明示表現」に含まれる6つのうち〈比較〉〈類似〉〈同一〉〈差異〉に該当するものを分類している。Israel et al. (2004) の直喩の写像特徴を示すことと関連し, 「それは」(例 (2)) 「こちらは」(例 (6)) などのような指示詞と係助詞によって被喩辞と喩辞がそれぞれ取り立てられ, 区別される場合, 被喩辞が喩辞とは別のものとして存在していることが明示的であるといえる。喩辞と被喩辞の類似性を明示的に示すことや, 指示詞によって複数の存在を示すことは, 喩辞と被喩辞の同一性を否定する表現として, 比喩性の把握に役立つと考えられる。なお, 比喩性がなく例示であると判断された用例では, 喩辞と被喩辞が同一ではないと明らかであり, この種の手がかり句は得にくい。

(6) 大人ばかりのグループになるとこちらはもうレストランさながら。(中略) 浜辺の食事とはいえ手を抜かないのはいかにもフランス人で, だから海水浴ウオッチングは止められない。(サンプル ID : PB39\_00017)

#### 4.2.2 限定や程度性

限定や程度に関する表現は, 4.2.1 のように喩辞と被喩辞が別のものであることが明示されるのでは

ないが, 別のものとして示唆される場合がある。鍋島・中野 (2017) の〈範疇化〉〈程度〉に該当する。「としか」「さえ」「とも」「には」のように喩辞に関する言及を限定する表現は, 被喩辞と喩辞の同一性が否定されていると読まれる場合があった。(7) は, 被喩辞が喩辞「としか受け取れな」と限定されることで, 喩辞の他の存在と読み取られ, 異なるものであるとして被喩辞と喩辞の同一性が否定されていると考えられる例である。(8) のように, 「僕にとっては」と限定されることで, 比喩性が読み取られる場合もある。また, 「ほど」「くらい」「級 (例 (9))」のような程度表現も, 被喩辞と比較する対象としての喩辞の存在があると考えられ, 被喩辞と喩辞の同一性が否定されるために比喩性が把握されたといえる。

(7) 白縮緬の襟のかかった襦袢の上へ薩摩緋を着て, 茶の千筋の袴に透綾の羽織をはおったそのこしらは, まるで傘屋の主人が町内の葬式の供に立った帰りがけで, 強飯の折りでも懐に入れていたとしか受け取れなかった。(例文番号 232)

(8) シンシア (筆者注: 盲導犬) に出会う前は自暴自棄になった時期もあった。僕にとっては女神のような存在。(サンプル ID : PN5c\_00007)

(9) 住居も, まるで部長級の住宅をちゃんと用意してもらうのだ。(例文番号 568)

#### 4.2.3 仮定, 疑問や推定

「と／にする」をはじめ, 「ならば」「たら」「そう考えると」のような仮定表現は (例 (6)), 喩辞と被喩辞が同一ではない状況であるとの設定を示すために用いられる。鍋島・中野 (2017) の〈認識〉〈仮想〉〈言語化〉〈比喩化〉の4パラメータに該当する表現を分類している。「(と) 思われる」「(という) 気がする」(例 (10)) などの推定表現, 「だろうか」「あろうか」などの疑問表現 (例 (11)) は, 当該表現が真ではない, 偽の可能性があるという根拠とも考えられるが, 喩辞と被喩辞の同一性を否定している表現ともいえる。(10) は, 現状 (被喩辞) が, 「気がし」ている状況 (喩辞) とは異なると読まれた例である。(11) は, 「聞える」もの (被喩辞) が, 「勇壮な行進曲」(喩辞) ではないという否定が, 「じゃありませんか」を根拠として判断された例である。明示的に喩辞と被喩辞の同一性を否定する表現で



はないが、疑問や推定によって同一ではない可能性が生じるため、比喩性が把握されたと考えられる。なお、(10) (11) にも見られるように、疑問や推定の表現が喩辞と被喩辞の同一性を否定する表現として取得される例では、被喩辞は文中に明記されない傾向にある。また、(12) のように、「か」「思う」「見る」などの判断に関する語句が比喩の標識として機能する場合の「よう」と共起しやすい傾向が見られる。

- (10) なんだか、もう一週間も二週間も、ここへおじゃましているような気がしますわ (例文番号 506)
- (11) ちょっと勇壮な行進曲のように聞えるじゃありませんか。(例文番号 920)
- (12) 米軍機の離着陸は人目を避けるかのように深夜から未明までの間にほぼ連日、平均で 5, 6 機ほど行われ、アフガンに向けて行き来している。(サンプル ID : PN1a\_00021)

#### 4.2.4 別の時間

喩辞と被喩辞の同一性が、文脈上、異なる時間に存在すると示されることによって否定されている例がある。4.2.1 と 4.2.3 に類する例も取得されたが、時間の違いによって目の現状（現在）と異なることを示しており、同時に存在しているのではない表現として別の分類項目と設定した。(13) は、「思い出（す）」により被喩辞である現状（現在）が、同一対象ということも可能であるが、喩辞（過去）とは異なることが示されている。「思い出」された喩辞と、被喩辞の同一性が時間の違いによって否定されているといえる。「やがて」などを用いてまだ発生していない未来であることを示す例もある。未来の場合は仮定に近く、4.2.3 の分類の表現を伴う傾向にある。「に／となる」などにより変化が示される場合は、4.2.1 の分類に近いといえる。「今度は」「その時」「～した時」「この頃」などの時間表現により、喩辞と被喩辞が別の時間の存在であることが示されていると考えられる。(14) は、「(あの時の) 話」が「昨日の記憶」とは別の時間であり、喩辞と被喩辞の同一性が否定されていると読み取られた例であるといえる。

- (13) 黒い水の上に仔犬の死骸やふるいゴム靴が浮いていた。私は勝呂医院の庭や診療室の臭いを思い出した (例文番号 105)

表 3

MIPVU によって取得された日本語比喩表現中の比喩指標要素の分布 (度数 3 以上とのべ総数・異なり総数)

短単位	PB	PM	PN	総計
様(よう)	6	13	41	60
的	5	4	44	53
言う(...という)	1	5	21	27
風(...ふう)	3	10	4	17
状(...状)	1	12	1	14
みたい	2	9	2	13
為る(と/に・する)		2	11	13
成る(と/に・なる)			13	13
物(もの)	10	1		11
ほど	2	5	1	8
らしい		6		6
感じ	2	2	2	6
ごとし	4	1		5
役(...役)			5	5
ばい		4		4
丸で(まるで)		2	2	4
化(...化)			3	3
感ずる		1	2	3
延べ総数	54	100	183	337
異なり総数	24	34	34	68

- (14) 「そうでした。あの時、(中略) 私も若かったなあ…。もう部下を叩く勇氣も気力もないもの」昨日の記憶のように、話は (後略) (サンプル ID : PB53\_00055)

#### 4.2.5 否定の明示

喩辞と被喩辞の同一性否定の観点で分類を行ってきたが、4.2.1 から 4.2.4 の分類はいずれも手がかり句が明示的な否定表現ではない。本調査では、喩辞と被喩辞の同一性を明示的に否定する表現の頻度は低い (後述の表 3)。しかし、「ありえない」「でない」をはじめ、(15) の「ではない」のように喩辞と被喩辞の同一性を否定する表現も取得された。「けれども」「だが」などの逆接によって否定する例もあった。

- (15) このひとは、カツプシではない。世津子の顔が、だんだんと若い猫の顔にみえて (例文番号 67)
- 明示的な否定表現の頻度が低いことは、1 つの用例において、比喩の標識は 1 つのみ用いられるのではなく、類似や指示、限定や程度などから喩辞と被喩辞の同一性を婉曲的に否定する場合が多く、複数種類の手がかり句を重ねて用いている場合が多かった (後述の表 5) ためと考えられる。当該表現が比喩表現であると判断される際には、複数の「何

らかの言語形式」が手がかかりとなっている可能性が高いともいえる。小松原 (2016) は、実例においては、「比喩“標識”」の組み合わせを「直喩性」と仮定し、直喩性が高いほど、比喩解釈が安定すると指摘している。複数の標識の共起という「言語形式」も、比喩表現の認識に関わる可能性があり、実際に「比喩指標要素」が「比喩指標」として機能するために、他の手がかかり句が必要とされる例も見られる (例 (12) など)。

#### 4.2.6 その他

該当する指標比喩の前後文脈に他の比喩表現が見られる場合や、前後文脈を含めて指標比喩が成立している場合など、主に文脈の影響が考えられる場合であり、4.2.1 から 4.2.5 に分類し難かったものをその他とした。

(16) は、鍋島 (2009) の指摘する「長距離シミリ」に類し、「むかでの足の～かもしれない」という後続文により、現状 (当該表現) の被喩辞が後続文で示された「むかでの足」を喩辞とする比喩表現と判断された例である。また、「異なる」「そのもの」のように同一性を示す表現によって強調され、非現実的と判断された例もこちらに分類した。(17) は「そのもの」、(18) は「文字通り」によって、被喩辞が喩辞と同一であると強調されている例である。(17) は、「この」という指示も含まれ、被喩辞と喩辞が同一ではないことがわかり、「そのもの」による強調が矛盾することにより、当該表現が偽であると認識可能とも考えられる。「家が太郎だ」という結合による認識のほうが強かった可能性もある。

このように、その他として分類した表現は、1文のみでは判断ができない例、1つのみでは手がかかり句として機能しにくい例である。これらの表現については、婉曲的な喩辞と被喩辞の同一性を否定する手がかかり句や、文脈的に比喩性を示す別の表現と重ねて用いられることで、手がかかり句として機能している場合があるといえる。

- (16) しびれるような苦悩の輪が、足元から一定の間隔をおいて、次々に這い上り、頭の上へ抜けて行く。むかでの足の運動を想像してもらえば、ほぼ当たっているかもしれない。 (例文番号 155)
- (17) この家は考えると太郎そのものであった。 (例文番号 1210)
- (18) 「史上最も大統領に影響力を持った女性」と呼

ばれ、文字通りの「右腕」だった。 (サンプル ID: PN2e\_00004)

また、前後文脈から喩辞と被喩辞の同一性の否定に関する手がかかり句が取得できなかった例も数例あった。用例としてどこまでを文脈として取得するかという問題でもある。(19) は、「銀次郎」が生きている、すなわち「死人」を否定する文脈を必要とする例である。(19) の場合は、「に変わる」を比喩の標識とした候補としての収集が可能であるが、同時に存在する結合比喩、選択制限の違反が比喩性の判断根拠としての背景となっている場合などは人手による文脈からの判定が必要となる。本調査で整理を試みた前後文脈の用例確認では、喩辞と被喩辞の同一性否定に関わる手がかかり句のみによる収集が困難であるため、今後検討を要する。

(19) フィルムの青い色が銀次郎の顔に落ち、たちまちその白い顔はいやらしい死人の顔に変っているのだ。 (例文番号 55)

#### 4.3 手がかかり句の分布

用例中で文脈が確認できた別の比喩表現や時制の異なる表現などを含めると、本調査においては手がかかり句がそれぞれ 1,926 件 (中村 (1977) の用例集)、936 件 (加藤他 (2020) の用例集) 収集された。そのうち、喩辞と被喩辞の「同一性否定」の観点で分類の整理が可能な 1,472 件 («その他」を除く、675 種類)、557 件 («その他」を除く、238 種類) について、用例集別の分類結果をそれぞれ表 4 に示す。表では、前節の 4.2.1 の分類を①として、以下それぞれ②から⑥で示した (以降同様)。

用例集の特徴により違いは見られるが、①と③に分類される手がかかり句の割合が高い傾向は共通しており、比喩の標識として認識しやすい表現にのみ着目するというよりも、当該結合周辺に出現する別のものを指示する表現や、疑問や推定の表現という喩辞と被喩辞の同一性を否定する表現を目にすることで、当該表現が比喩表現であるとの認識を得る可能性が考えられる。

#### 4.4 比喩の標識としての手がかかり句

広く収集された手がかかり句の比喩の標識としての可能性を検討したい。前節までで、本稿で収集した手がかかり句は、喩辞と被喩辞の同一性を否定する表現の多いことが確認された。文脈上、先行研究に示

表 4  
用例集から収集した同一性否定の観点による手がかり句の分類

分類	①別指示	②限定や程度性	③仮定、疑問や推定	④別の時間	⑤否定の明示	⑥その他	計
中村(1977)件数	452	399	381	185	55	454	1,926
(割合)	(23.5%)	(20.7%)	(19.8%)	(9.6%)	(2.9%)	(23.6%)	(100.0%)
加藤(2020)件数	165	70	246	65	11	379	936
(割合)	(17.6%)	(7.5%)	(26.3%)	(6.9%)	(1.2%)	(40.5%)	(100.0%)

されてきた比喩の標識を含む手がかり句によって喩辞と被喩辞の同一性の否定が認識されたことについて、先行研究に見られる標識との関わりを整理しておく。

まず、山梨 (2015) の〈同一性の否定の直喩標識〉と、本稿が広く認定した「喩辞と被喩辞の同一性の否定に関わる手がかり句」との異同に関し、考察を試みる。なお、〈強い同一性の直喩標識〉は、その他の要素や文脈によって否定される選択制限の影響可能性が高いため、そもそも異質な結合であると認識されやすく、大げさな印象とするための強調表現といえよう。山梨 (2015) では「と同じ」「違いはしない」「まさに」「まるで」「そのもの」などが〈強い同一性の直喩標識〉に含まれている。喩辞と被喩辞の同一性を強い類似性の認識で言及する表現は、「A と B は異なる存在であるという前提 (p. 86)」を示し、別のものを指示する表現ともなる。この場合、むしろ喩辞と被喩辞の同一性を否定しているともいえる。〈弱い同一性の直喩標識〉は、推定 (限定) や判断 (程度) などをはじめ、一部を否定するか疑問を呈していることを示すため、最も多様な表現が得やすい分類であろう。

〈同一性の否定の直喩標識〉は、別のものを指示する場合をはじめ、直接的に喩辞と被喩辞の同一性を否定する表現を用いる場合といえる。山梨 (2015) でも、「ではあるまい」「どこではない」「じゃあないんだから」が挙げられるが、否定表現に「では」のような限定や「のだから」による別指示の手がかり句を加えて「標識」としていることから、否定の明示のみでは比喩の標識とならないことを示していると考えられる。否定が明示されていた (15) でも、

表 5  
中村 (1977) の「比喩指標要素」と本稿の手がかり句の共起 (上位頻度件数)

類種号	指標要素	件数	①別指示	②限定や程度性	③仮定、疑問や推定	④別の時間	⑤否定の明示
K-9-1	よう	239	17	38	41	25	11
F-1-1	まるで	93	35	37	35	16	9
S-9-2	...という	42	16	4	3	3	5
J-3-1	も	40	38	18	16	8	5
F-1-3	あたかも	39	13	11	9	4	4
J-2-1	でも	33	8	38	18	5	1
K-9-3	みたい	32	1	1	3	0	2
F-8-1	なにか	25	8	11	13	2	1
F-1-4	ちょうど	18	9	4	4	4	0
F-3-3	ほとんど	17	9	8	5	1	0
D-12-1	似る	16	19	10	3	2	0
F-8-4	なんだか	16	3	5	4	3	1
K-1-3	同じ	16	9	7	4	3	1
K-9-2	ごとし	16	0	1	1	3	0

「ではない」に加え、次文に「見える」が含まれていた。

表 5 に、中村 (1977) の「比喩指標要素」と喩辞と被喩辞の同一性を否定する手がかり句との共起を示す。ここでは、用例中の結合 (選択制限違反) を 1 単位とした比喩表現の件数としている。1 つの比喩表現に複数の手がかり句を含む場合があることがわかる。たとえば、「も」は対照すべき別のものが存在するという喩辞の参照を指示する場合があります。

表 6  
中村 (1977) の指標比喩用例における比喩種別

種別	類似性の転換	質的転換	例示	量的転換	その他	計
表現数	615(48.7%)	507(40.1%)	122(9.7%)	10(0.8%)	10(0.8%)	1264

そのものが「①別指示 (4.2.1)」として機能している例が9割以上を占めたが、直接別のものを指示する用例でなかった場合を含め、その他の手がかり句が複数共起することを表している。一般的に比喩の標識と認識されやすい要素の「よう」を含み手がかり句を共起した比喩表現は239例と多数が収集されており、何らかの否定表現を同時に含む例も11例あった。なお、「まるで」は「よう」をはじめ「みたい」などと共起する例が多い傾向にあり、中村 (1977) の指標比喩用例集でも「まるで」を含む102例中「よう」の共起が47例あり、表5でも「まるで」が単独でなくその他の手がかり句と共起する例は93例に上ることがわかる。「比喩指標要素」の共起パターンに加え、「比喩指標要素」と本調査で取得された新たな表現を含む喩辞と被喩辞の同一性を否定する(弱い肯定を含む)表現の共起を加えることにより、比喩表現であると認識しやすくなる可能性が期待される。

比喩の標識の有無により比喩表現であると認識しやすくなるのかという点については、表現を構成する用例中の様々な要素のいずれが標識として機能しているのかを定義することが困難であり、比喩表現として認識される異質な結合(たとえば「AハBダ」)に、いわゆる指標比喩が加わったかどうか(たとえば「AハBノヨウダ」)というのみでは単純な対照がし難い。どこまでを関連する表現とするのかという範囲設定の問題もある(例(19)参照)が、まずは手がかり句を用例収集に活用することなどを目的とし、どのような表現が比喩の標識として機能し得るのかを明らかにする必要がある。

## 5. 考察：手がかり句による比喩性の把握

本稿の得た手がかり句の有用性を検討したい。典型的な比喩の標識として機能していないとしても、直喩と認識しにくく隠喩と考えられるような比喩表現において、当該表現の比喩性の把握に有用となっている可能性が考えられる。指標比喩用例における比喩表現の種別情報を用い、比喩性の把握と手がかり

り句の関係を考察したい。

まず、中村 (1977) の指標比喩用例中に含まれる比喩表現(結合)について、加藤他 (2020) と同様の基準と手順により、類似性による転換(いわゆる隠喩)・量的転換(いわゆる換喩)・質的転換(いわゆる提喩)の別を付与した結果を表6に示す。換喩と提喩も隠喩と同様に何らかの転換がある異質な結合ととらえるが、中村 (1977) の定義により、事物・事象の隣接性という類縁関係に基づく「質的転換」(換喩)、類と種という概念の「量的転換」(提喩)の情報を付与している。よって、異質な結合が見られないと考えられた用例については「例示」「婉曲」などと区別した。「例示」や「婉曲」の区別は国立国語研究所編 (1951) により、例示は「私らみたいな、いろんな重荷になるような条件や周囲があるから」、婉曲は「かぜをひいたみたいだ」などの用例に付与した。

また、いずれの用例も「比喩指標」を含むため、比喩の標識の有無による隠喩と直喩との区別は行わなかった。複数の比喩表現が含まれる用例については、「比喩指標」を含まない文脈部分(中村 (1977) の指定する比喩表現外)を集計外とした。慣用語、諷喩、判別不能な例などは「その他」にまとめた。提喩は、喩辞と被喩辞の類似性を意識させる表現において隠喩との区別の判断が作業者により揺れる例が散見され、種別の分類には揺れが生じる。例示の区別が比喩性(結合の異質性、選択制限)の判断において揺れる例も多い。そのため、ここでは特に作業時に例示(結合・比喩性がない)とされた表現を質的転換の判断と区別した。加藤他 (2020) の収集した用例では、類似性の転換が63.4%、質的転換(提喩)が10.8%、量的転換(換喩)が3.7%、慣用語などその他が22.0%という分布になっていた(加藤他 (2020) の表7から算出)が、新聞記事から網羅的に収集した比喩用例において質的転換(提喩)は1.2%にすぎない(加藤, 2020)という調査もあるため、種類の分類の揺れを考慮しても、指標比喩の用例では質的転換(提喩)の割合の高いことが特徴的

表 7

中村 (1977) の比喩表現種別と同一性否定の手がかり句

種別	表現数	①別指示	②限定や程度性	③仮定、疑問や推定	④別の時間	⑤否定の明示
質的転換	507	199	177	168	82	36
類似性の転換	328	145	117	97	50	30
例示	122	27	21	22	13	6
類似性:具象化	115	24	32	34	17	4
類似性:擬生化	62	21	17	22	8	3
類似性:擬物化	50	15	18	16	4	4
隠喩:擬人	43	12	10	15	6	3
量的転換	10	4	1	4	3	1
類似性:抽象化	6	2	1	0	0	1
その他	10	3	5	3	0	1
総計	1264	452	399	381	183	89

であると考えられる。質的転換（提喩）や例示に類した〈比較〉の傾向が強いことは、Israel et al. (2004) の起点領域と目標領域に同時に存在する焦点が直喩の特徴であるという示唆とも関わるだろう。

次の表 7 には、比喩表現の種別と同一性否定の観点による手がかり句分類との関係を示す。一つの表現中に複数の手がかり句を含む場合がある。4.2.6 の「⑥ その他」については、要素数が数えにくいいためここでは集計外とした。また、比喩表現の種別のみならず、類似性の転換の細分類も付した。類似性の転換の細分類についても加藤他 (2020) と同様に、要素の結合に何らかの転換（表中は「転換」とのみ示す）が確認された場合のほか、具象化や擬人化などの分類が確認できれば付した。「擬人化：物（抽象物・具体物）を人に（「心が呟く」など）」「擬物化：人を物に（「娘が片付く」など）」「擬生化：動植物に・活喩・準擬人化（「嵐が咆哮する」など）」「上記以外の具象化：抽象物を具体物に（「無駄が転がる」など）」「上記以外の抽象化（抽象物を具体物にするなど）」「その他の転換：別種の物事に（「響きが涼しい」など）」の 6 分類を付与した。

以上から、例示（比喩表現とは読めない）と判定された表現では、手がかり句が含まれない用例の割合が高く、反対に提喩と判定された表現では用例中から手がかり句が多く取得される傾向が確認できる。喩辞と被喩辞の同一性を否定するような手がかり

り句は、比喩表現の把握において影響のある可能性が見られ、いわゆる隠喩の把握に際しても、結合の異質性として周辺文脈で喩辞と被喩辞の同一性が否定されていることの影響が期待されよう。また、隠喩の判定において、慣用的であるか概念メタファーとして比喩性が意識されにくい例の多い「具象化」と分類されたような表現で、いわゆる比喩の標識のほかに手がかり句の含まれない傾向が見られる。比喩性は曖昧で良い場合も多い。比喩の標識として機能することもある「よう」などでは、助動詞の用法付与作業においても一意に決められず、婉曲や例示などの用法が類似の用法と区別できなるとされた例が多数確認されている（加藤他, 2019a）。用例の比喩性の程度などとの関係も確かめる必要がある。

本稿の調査で得られた手がかり句は、比喩の標識とはいえども比喩の把握に関わる表現であると考えられる。隠喩と直喩は、比喩の標識の有無による区別よりも、比喩性の把握において「何らかの言語形式」が認識されやすいかどうかという区別が妥当である可能性がある。また、選択制限違反といわれる比喩の標識の間には、当該表現が比喩であると把握されるために、強弱はあれ当該表現内あるいは周辺文脈において、喩辞と被喩辞が同一ではないと読み取られるための表現が取得されやすいことが確認された。このことは、Israel et al. (2004) の直喩に関する指摘の反映として、起点領域と目標領域が同一でないことを示す表現が出現しやすいとも考えられる。よって、比喩性の把握には、典型的な比喩の標識にとどまらず、一般に思われているよりも様々な表現が、（読み手が比喩の標識と認識していないとしても）喩辞と被喩辞が同一でないことを示す機能として影響している可能性がある。

今後、手がかり句の含まれる表現をさらに広く収集し、比喩表現の収集可能性の検証を進める。収集できた比喩表現の用例から、さらなる手がかり句リストが得られる可能性もある。隠喩（結合）があからさまな選択制限の違反であれば、手がかり句の共起も少ないと予想されることから、手がかり句を含む比喩表現の用例において、手がかり句の出現量や種類に段階性が確認される可能性がある。また、手がかり句を活用して多くの比喩表現を収集することにより、様々なレジスタやジャンルによって日本語比喩表現における「何らかの言語形式」の出現状況がどのように分布しているかという調査も可能となろう。

## 6. おわりに

直喩と隠喩の区別として比喩の標識の有無があるとすれば、比喩の標識にはどのようなものがあり、どのように機能しているのかを調査するため、比喩性の把握に用いられた手がかり句を、いわゆる比喩の標識に限らず、広く収集することを試みた。作業者によって手がかり句と認識するかどうかの判断には揺れが生じる可能性はあるものの、本稿の作業により指標比喩表現の用例集から収集された手がかり句の多くは、喩辞と被喩辞の同一性を否定するという観点で分類できた。そして、既存のある「比喩指標要素」を含む表現が比喩の標識として機能する場合、用例中に喩辞と被喩辞の同一性を否定する手がかり句が同時に用いられており、ゆえに当該要素が比喩の標識としての機能であると読み取られる傾向が見られた。本資料は、日本語比喩表現に出現する手がかり句のリスト例として大規模な用例収集に活用できる可能性がある。

また、比喩表現は、わかりやすく事象を伝達し、伝達された受容者が明確に認識するという言語活動として有用と考えられる。本稿で見た周辺文脈などにおいて本資料の手がかり句により喩辞と被喩辞の同一性が否定される傾向は、比喩性を認知する際に、喩辞と被喩辞の同一性否定を求める可能性を示唆する。比喩の標識は、比喩表現そのものを受容者に気づかせるために用いられるというよりも、表現内容が比喩的であることを示すとすれば、隠喩と直喩の差は、比喩の標識の有無というよりも、比喩性の把握を促すための表現の認識の差であると考えられる。手がかり句の出現量や種類は、隠喩と直喩の段階性と関わる可能性が推測される。

今後、読み手が比喩性を強く感じる表現（およびその周辺）に喩辞と被喩辞の同一性を否定する表現が含まれる可能性を検証し、手がかり句も活用した比喩表現の大規模収集と日本語比喩表現の実態調査を目指している。さらに、本資料に基づく比喩の自動抽出手法の検討を進めたい。

## 謝 辞

本研究は科研費 JP18K18519, JP22H00663 および国立国語研究所基幹型共同研究プロジェクト「実証的な理論・対照言語学の推進」によるものである。

## 文 献

- Cameron, L., & Deignan, A. (2003). Combining large and small corpora to investigate tuning devices around metaphor in spoken discourse. *Metaphor and Symbol*, 18(3), 149-160. [https://doi.org/10.1207/S15327868MS1803\\_02](https://doi.org/10.1207/S15327868MS1803_02)
- Gibbs, R. W. Jr. (1994). *The poetics of mind: Figurative thought, language, and understanding*. Cambridge University Press.
- Goatly, A. (1997). *The language of metaphors*. Routledge. <https://doi.org/10.4324/9780203210000>
- Goatly, A. (2011). *The language of metaphors* (2nd ed.). Routledge.
- Israel, M., Harding, J. R., & Tobin, V. (2004). On simile. In M. Archard, & S. Kemmer (Eds.), *Language culture, and mind* (pp. 123-135). CSLI Publications.
- 加藤 祥 (2020). 日本語比喩情報付与コーパスの作成と新聞における比喩実態調査の試み 松本曜教授還暦記念論文集刊行会 (編) 認知言語学の羽ばたき：実証性の高い言語研究を目指して (pp. 144-159) 開拓社
- 加藤 祥・浅原 正幸 (2020, September 5). 比喩表現の指標となる「同一性否定」の手がかり句 第 21 回日本認知言語学会 オンライン
- 加藤 祥・浅原 正幸 (2023). 『比喩表現の理論と分類』データの電子化および情報付与 国立国語研究所論集, 25, 1-19. <https://doi.org/10.15084/0002000009>
- 加藤 祥・浅原 正幸・山崎 誠 (2019a). 分類語彙表番号を付与した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の新聞・書籍・雑誌データ 日本語の研究, 15(2), 134-141. [https://doi.org/10.20666/nihongonokenkyu.15.2\\_134](https://doi.org/10.20666/nihongonokenkyu.15.2_134)
- 加藤 祥・浅原 正幸・山崎 誠 (2019b). 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』新聞・書籍・雑誌データの助動詞に対する用法情報付与 日本語学会 2019 年度春季大会予稿集, 161-166.
- 加藤 祥・菊地 礼・浅原 正幸 (2020). 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に基づく指標比喩データベース 自然言語処理, 27(4), 853-887. <https://doi.org/10.5715/jnlp.27.853>
- 菊地 礼 (2020). 偽の情報提示する構文と比喩：「まるで」と「よう」 中央大學国文, 63, 234-250.
- 国立国語研究所 (編) (1951). 現代語の助詞・助動詞：用法と実例 国立国語研究所報告 3 秀英出版
- 国立国語研究所 (編) (2004). 分類語彙表 増補改訂版 国立国語研究所資料集 14 大日本図書
- 小松原 哲太 (2012). 直喩の二側面と修辭的効果の二つのタイプ：助動詞「ようだ」に関する事例分析 言語科学論集, 18, 1-25. <https://doi.org/10.14989/173563>
- 小松原 哲太 (2016). レトリックと意味の創造性：言葉の逸脱と認知言語学 京都大学学術出版会
- 鍋島 弘治朗 (2009). シミりはメタファーか？ 語用論的分析 日本語用論学会第 11 回大会発表論文集, 63-70.
- 鍋島 弘治朗・中野 阿佐子 (2017). シミりとメタファーの境界：シミリを導入する表現の分類に関する一考察 *Kansai Linguistic Society: Proceedings of the Annual Meeting of the Kansai Linguistic Society*, 37, 121-132.
- 中村 明 (1977). 比喩表現の理論と分類 国立国語研究所報告 57 秀英出版 <http://doi.org/10.15084/00001254>
- 中村 明 (1995). 比喩表現辞典 角川書店
- 岡 隆之介・大島 裕明・楠見 孝 (2018). 比喩研究のための直喩

- 刺激-解釈セット作成および妥当性の検討 心理学研究, 90(1), 53-62. <https://doi.org/10.4992/jjpsy.90.17236>
- Pragglejaz Group. (2007). MIP: A method for identifying metaphorically used words in discourse. *Metaphor and Symbol*, 22(1), 1-39. [https://doi.org/10.1207/s15327868ms2201\\_1](https://doi.org/10.1207/s15327868ms2201_1)
- Steen, G. J., Dorst, A. G., Herrmann, J. B., Kaal, A. A., Krennmayr, T., & Pasma, T. (2010). *A method for linguistic metaphor identification*. John Benjamins Publishing Company. <https://doi.org/10.1075/celcr.14>
- 内海 彰 (2005). 隠喩と直喩, どちらが詞的か 人工知能学会第 21 回ことば工学研究会資料, 1-8.
- 山梨 正明 (1988). 比喩と理解 認知科学選書 17 東京大学出版会
- 山梨 正明 (2015). 修辭的表現論: 認知と言葉の技巧 言語・文化選書 56 開拓社

### 加藤 祥 (正会員)

2011 年神戸大学大学院人文学研究科博士後期課程社会動態専攻修了。2012 年より国立国語研究所コーパス開発センタープロジェクト PD フェロー, 同プロジェクト非常勤研究員。2020 年より目白大学外国語学部日本語・日本語教育学科専任講師, 博士 (文学)。

### 浅原 正幸 (正会員)

2003 年奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究博士後期課程修了。2004 年より同大学助教, 2012 年より国立国語研究所コーパス開発センター特任准教授, 現在国立国語研究所研究系教授・総合研究大学院大学教授・東京外国語大学教授 (クロスアポイントメント)。